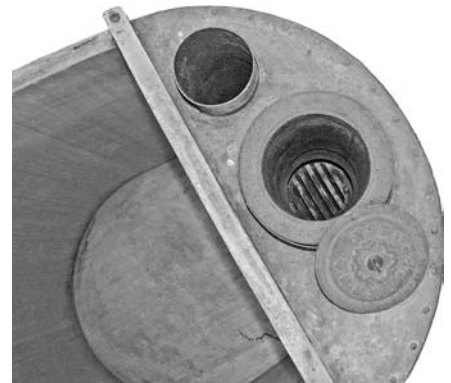




▲上から見た焚き口 (右)

風呂桶内部の様子 ▶  
釜の手前右の棒は木柱

## 寄贈資料の中から

## 風呂桶

今回は資料の中から風呂桶を紹介します。沼津では木製の風呂桶は、各家庭により時期が異なりますが、昭和40年代頃まで使われていました。

この資料は小判形で、浴槽の中に銅と鉄でできた筒状の釜がつき、これで湯を沸かします。焚き口は上にあります、薪を入れて燃やします。この釜は改良型なので、筒が途中で枝分かれています。また、入浴中に筒に触れてやけどをしないよう、浴槽の中の一部に板がはめられています。焚き口の隣の穴は煙突用で、側面下には通風孔があります。風呂桶と釜が一体化しているため、移動して使うことができるのが利点です。

木の風呂桶は江戸時代には使われており、移動風呂として商いが行われていました。当初は他で沸かした湯を汲み入れていました。やがて、鉄釜を桶に内蔵したものがつくられて旅籠などに置かれ、鉄砲風呂と呼

ばれて江戸を中心に広く用いられました。

資料の桶は大人一人が入れるくらいの大きさで、浴槽の高さは約75cm、深さは約65cmあります。実際に使う時は、洗い場に高さのあるすのこを置くので跨ぎやすくなります。しかし、子供には出入りが大変で、小学校低学年くらいまでは親と一緒に入りました。また、湯加減が大事で、一度入ると自分では調節がしづらかったので、入る前によく確認することが大切でした。

昭和20年代に沼津市内で風呂桶を製作していた職人の話によると、当時は風呂桶をつくるのに板材を仕入れたそうですが、1日か2日で仕上げなければならなかったといいます。また、今の平町の辺りにいた風呂桶専門の桶屋さんはとても上手につくり、一人で1日半かけて2つの風呂桶をこしらえてしまったとのことでした。

## 駿河湾の漁

## 川上 貢さんの漁話

## 南部の漁師たちの生活 (2)

休みは1ヶ月に1回ぐらいはあったが、決まった曜日が休みというわけではなく、漁の次第によって休みとなる。漁があるときは休むことはできない。盆休みというものもなく、漁師たちは地元<sup>お</sup>に帰ることなく大瀬崎で漁を続ける。数少ない休みの日には、自分たちの動力船を使って千本に遊びに行き、夜中に帰ってきた。

漁が多い時は1日に3回4回と網を揚げることになるが、通常は朝に揚げて夕に揚げる1日2回の網揚げなので、網揚げの時間がくるまでは自由に過ごすことができた。自由時間と言っても大瀬の周りには飲んだり遊んだりできるようなところはなく、寝ているかうろつくぐらいで他にやりようがなかった。暇だったので花札や麻雀をやっていた(写真1)。仕事がある時は仕事をするが、何もない時は夕方まで遊んでいる。それが定置網のいいところであり、悪いところでもある。

晩酌をすることは少なく、普段はあまり飲まなかった。中には4 km離れた江梨の酒屋まで行き、酒を飲んで帰ってくる者もいた。漁師たちが住む番屋では門限というものはなく、夜明けに行われる朝の網揚げに間に合えばいつ帰ってきても良かった。

4月4日は海上安全と豊漁祈願の神として知られる大瀬神社のお祭りの日である。不漁であっても神社にお参りに行くことはなかったが、この時ばかりは希望者を募りお参りに行った。前年の漁が終わった時に沼津魚市場からもらった大漁旗を持って行った(写真2)。朝の網揚げで獲れたタイカブリを1匹奉納した。周辺地区の漁師たちは船でお参りに来ていたが、川上さんたちは番屋からすぐの所にあるので歩いて参った。

祝いがある時は、度々、番屋で酒席が開かれることがあった。2月に南部から集まった時、網を海に設置するためのガワを張った時のガワバリイワイ、網入れの時、4月の大瀬祭りから帰った後、大漁だった時にお酒をふるまった。川上さんが住む事務所に日本酒の一升瓶を10本20本とあらかじめ用意しており、祝いの度に3本ずつ渡していた。30人近くで飲むことになるので1人当たりはそれほどの量にはならなかった。番屋で開かれる酒席は必ずコダイボウ(副船頭)が「今日はご苦労さん」といったような簡単なあいさつで始められた。

10月20日頃、大謀網による漁が終わり、南部の漁師たちが故郷へ帰る。帰る時も龍宮丸を頼み大瀬から沼津港湾まで行く。豊漁だった年は港湾に着いた後に宴

会が催され、料亭を借りて芸者を呼び盛大に行われた(写真3)。そして、夜行列車に乗って故郷へと帰って行く。

南部に帰った後は、どのような生活を送っていたのかはわからない。翌年の2月になると、また、南部の漁師たちが大瀬にやって来る。

(話：川上 貢氏 昭和5年生まれ 沼津市今沢在住)



写真1：麻雀に興じる漁師たち

(昭和37年頃 川上 貢氏 撮影)



写真2：大瀬神社に大漁旗を持ってお参りに行く

(昭和32年頃 川上 貢氏 撮影)



写真3：大謀網による漁が終わった後に行われた宴会

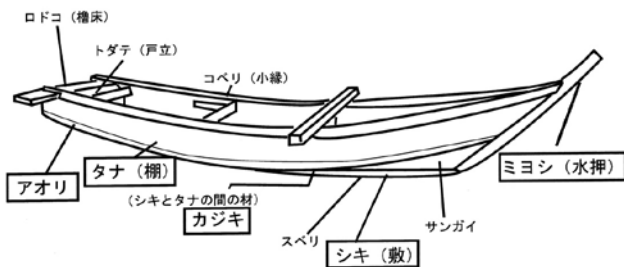
(昭和34年頃 川上 貢氏 撮影)

## 木造和船の造船工夫

現在、企画展「沼津の船大工道具」を開催しています。かつて、沼津の海岸線にはおびただしいほどの木造漁船が並び、数多くの船大工が漁業を支えていました。木造船の造船は戦中～昭和40年代までがピークでした。戦中は軍用の物資運搬船の造船のため、船大工は徴兵されませんでした。戦後は物資運搬船や漁船のほか、観光船などのニーズが増えました。当館所蔵の船大工道具は、最も木造船づくりが盛んだった時期に活躍した船大工の方々に寄贈していただいたものです。

さて、今回は沼津では最後の現役船大工となってしまう佐藤造船の菅野勝さん（70歳）と、元漁師で実体験を基にした精巧な船模型を製作なさっている鈴木真司さん（78歳）からお伺いしたお話を元に、木造和船を形づくる船材について、木造船の構造の進化についてご紹介します。

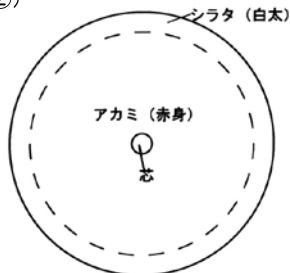
(図①)



上図は木造和船の主要な部位の名称を示したものです。木造和船づくりは船に適した立木の伐採からスタートします。船体に用いる樹木はスギです。船大工は、直立して見たときの樹木の感覚を「メドオリ（目通り）」とよびます。テンマセン（伝馬船）を造るとき、スギの太さがメドオリで5尺あれば、テンマセン一艘の外部分の板を一本の木からとることができます。

製材する際、木の芯の部分は割れやすいのでこれを避けて挽きます。中心から両側に幅一尺八寸とった部分がシキ（船底）板になります。さらにそこから両側に幅一寸とった部分をタナ（側板）・カジキ（船の開きを決める部分）用に挽きます。

(図②)



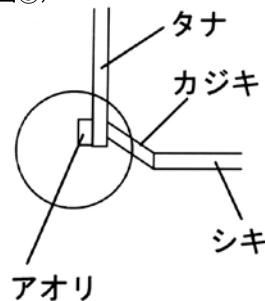
左図は木の断面図です。芯に近い赤い部分を「アカミ（赤身）」、アカミの外側の白い部分を「シラタ（シラダ）」といいます。シラタは真水に浸かると腐りやすい性質を持ちます。

船大工の菅野さんは横浜の川船の造船を依頼された際、「シラタは使わないでくれ」という要望を受けました。造船は沼津で行いましたが、川船は海水に浸けられないので、船の納品時はトレーラーに新造船を載せて、横浜まで陸路で運んだそうです。海や狩野川河口などの海水の混ざっている河川であれば、シラタの混ざった船材でも造船に使えるとのことでした。

伝統的な木造和船は櫓や櫂を使って漕ぐものでしたが、大正初期に焼玉エンジンが導入されて以降、船もより大型化し、漁場も拡大していきました。

大正から昭和10年代くらいまで我入道で用いられてきた大型漁船に「クロミヨウシ」があります。クロミヨウシは焼玉エンジンを搭載したサバー本釣り漁船で、初夏は伊豆七島、冬場は房州まで出漁しました。

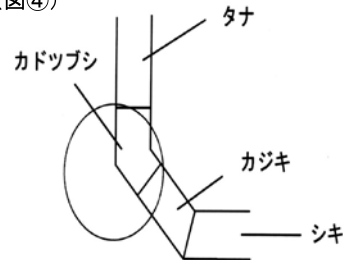
(図③)



左図は伝統的な木造和船の断面の一部です。タナとカジキの接合面は波が当たり水圧がかかるため、船の構造上弱い部分です。そのため「アオリ」とよばれる補強材を取りつけて、波のあおりから船体を守る工夫がされて

いました。動力が帆で受ける風や櫓だった時代はこれでもよかったのですが、エンジンを積んで走るようになってからは、船に当たる波の衝撃が強くなり、この型の船ではもたなくなりました。そこで、クロミヨウシでは波の衝撃からの破損を防ぐため、アオリの部分の構造を変化させました。

(図④)



左図はクロミヨウシの断面の一部です。クロミヨウシではタナとカジキの間に「カドツブシ」という材をはさみ入れました。これにより、今までの構造ではもろに波がぶつかっていた角の部分がなくな

り、下からの波の衝撃をうまく逃がすことができるようになりました。また、今までのアオリ材は上からカイオリクギ（またはアオリクギ）とよばれる船釘を打ちつけて固定していたのに対し、カドツブシは内側のアバラ（肋骨：木造和船の船体の内側にとりつける補強材）の材にボルトでしっかりと締めつけます。これで丈夫さも増し、エンジンを使った遠海への出漁に耐えうる船になりました。（参考文献：『木造和船の造船可能性調査報告書』海の博物館、『沼津市歴史民俗資料館紀要5』当館）

### 魚見のある風景③

昨年度の企画展のために収集した地先漁場の資料の中から魚見が写されている写真を紹介します。

左の写真は、明治史料館で所蔵する絵葉書です。「沼津名勝 静浦多比濱」とあるように静浦の多比の浜から南西方向に内浦重寺の淡島を望んだものです。

写真右手の岬が多比地区の海岸の中央に突き出した松ガ崎で、左側がエーノマエの漁場（網戸）です。崖下の狭い磯浜は埋め立てられ、二か所の突堤が築かれて、内側が船溜りとなり、船尾に鳥居の付いた沢山の小型の木造漁船が係留されています。道は陸揚げされた船で塞がれています。トンネルができて、使われなくなったと見られます。

崖下には網小屋らしい小屋が建てられており、周辺には竹製の生簀籠が置かれています。

岬の先端は、切り通しとなって道が通り、先端だけが削り残され、小高い丘となっています。その頂上には4本の丸太柱の櫓が建てられています。右側は柱に横棒が梯子状に止められており、下段は補強のための枠が作られ、上段に床が張られ、手すりもつけられています。（「静岡県水産誌」では、この形のものを魚見台と呼んでいます。）

『静浦の民俗』によれば、多比の松ガ崎にはオオヨ



ミドとヨコミドが設けられており、岬の高所にミヨドーシが常駐する2坪くらいのオオヨミドの魚見小屋が建てられていました。二つの魚見は、西側の入り江にあるフナコシノホラの網戸の魚見も兼ねていました。写真はヨコミドと考えられます。

平成5年に羽衣出版から発行された『静岡県の絵葉書』には、同じ場所を反対側の多比船越から写した絵葉書が掲載されていますが、倍くらいの高さの堅固な櫓が組まれています。切通しの道も使われているようですから、より古い時期の様子を示しているものと見られます。

### 資料館からのお知らせ

#### 企画展「沼津の船大工道具」開催

平成26年2月1日から2階展示室において、国指定重要有形民俗文化財「沼津内浦・西浦および周辺地域の漁労用具」コレクション『沼津の船大工道具』を開催しています。

当館が所蔵する同コレクションの中から、船大工の道具を展示しています。今ではほとんどその姿を消してしまった木造漁船は、地元の船大工さんの作業場で作られました。

船大工さんは、厚い板を曲げ、ツバノミで開けた孔に船釘を打ち込んで、接ぎ合わせ、船に仕上げて行きました。船大工さんたちの知恵と技の世界に触れてみてください。



#### 社会科見学にどうぞ



第五小学校3年生の社会科見学(2/20)の様子

#### 沼津市歴史民俗資料館だより

2014.3.14 発行 Vol.38 No.4 (通巻201号)

編集・発行 〒410-0822 沼津市下香貫島郷2802-1

沼津御用邸記念公園内

沼津市歴史民俗資料館 TEL 055-932-6266

FAX 055-934-2436

URL: <http://www.city.numazu.shizuoka.jp/kurashi/shisetsu/rekishiminzoku/index.htm>

E-mail: [cul-rekimin@city.numazu.lg.jp](mailto:cul-rekimin@city.numazu.lg.jp)